漢字の語源

山田勝美

漢字の成立・用法についての六種別——六書

1 象形　具体的な物の形態の特徴をかたどって作られた文字。

2 指事　抽象的な事物を点画等の記号により指し示した文字。

3 会意　二字以上を意味の上から組み合わせて作られた文字。

4 形声　一字は意味を、一字は発音を表す両者を組み合わせて作られた文字。

5 転注　漢字の発音や意味を転じて別の字と同じ意味を表すようにした用法。

6 借用　漢字の意味にかかわらず、その発音だけを借りて同音の別の意味を表すようにした用法。仮借ともいう。

角川小辞典——1

角川小辞典——1

漢字の語源

田勝美

角川書店

漢字の語源

著　者・山田勝美
発行者・角川春樹
印刷者・中村　武　長野市旭町一〇九八
製本者・若林義一　東京都板橋区舟渡三の二
発行所・角川書店　東京都千代田区富士見二
振替口座　東京三一一九五

初　版・昭和五十一年三月三十日発行
十　版・昭和五十四年二月十日発行
装　丁・代田　奨
製版印刷・信教印刷　製本・若林製本
落丁本、乱丁本はお取替えいたします
0581-060100-0946(0)
©Printed in Japan

著者紹介
山田勝美（やまだかつみ）　明治四十二年一月千葉県に生まれる。昭和十年広島文理大学漢文科卒業後、東京大学中国哲学科に研究生として学び、加藤常賢博士について契金文を研究。三十二年「塩鉄論の基礎的研究」によって博士号を与えられた。四十六年中華学術院より名誉哲士（文学博士相当）を贈られる。現在、上智大学・同大学院教授。東洋大学・二松学舎講師。
著作　『論衡上』『塩鉄論』*『角川字源辞典』（共著）『生きていた絵文字の世界』『中国教育宝典上下』（共著）*『中国名詩鑑賞辞典』『全釈論語』など。

＊は角川書店刊

序

わが国の戦後におけるゆき過ぎた国語統制策は、今や青少年の著しい国語力の低下となってはね返ってきつつあり、国民の国語意識の衰弱化は、社会的混迷に拍車をかけており、国語審議会は目下その手なおしに追われているというのが現状ではなかろうか。理想をいえば、国語国字などは、もともと政府主導型の統制策など取るべきではなく、すこし乱暴な言いかたであるが、むしろ放任しておいても、やがては自然に落ちつくべきところに落ちつくものであって、むやみな統制など百害あって一利なしといってよいであろう。

世に漢字の不便を説く者は多いが、その便利さを弁護する者の少いのは遺憾である。そもそも漢字が非アルファベット系の諸文字のうちにあって、そのすぐれた特質を生かしつつ、地域による多少の音値差はあるものの、日中韓を中心とする東アジア文化圏における国際的共通字たる機能を十分に果しつつあることは、今日何人も否定し得ない事実であろう。ただし、それはあくまで正書体、すなわちいわゆる旧字体に属するものであって残念ながらわが国のいわゆる当用漢字体や中共の簡化字などではない。この意味からしてもわれわれは、ひとり当用漢字体に通暁するためばかりでなく、古典の読解や書道、篆刻などの研究上からと共に、その広汎な国際性を有する点にかえりみて、さかのぼってその正書体や、字源を示しているとみられるその古形・古義をも把握することが、真に漢字を活用し、これを自家薬籠中のものとすることにつながるものであると思う。

最近わが国の国際社会における地位の急速な向上に伴い、日本語に対する諸外国の関心がとみに高まりをみせ、都下の二三の官私立大学において、すでに「日本語学科」が設置され、日本語の国際的進出の第一歩が踏み出された。もちろん日本語そのものにも幾多の問題点はあろうし、特にその文字たる漢字にも克服すべき難点は多々あろう。がともかく、わが国字および国語が国際的な脚光を浴びるにいたったことを思う時、これに関与する者の使命の重大さを改めて痛感せざるを得ない。今を去る四百数十年前、宣教のためはるばる渡来したイエズス会士のフランシスコ・サベリオは、かつて日本語を「悪魔のことば」ときめつけたが、皮肉なことに、日本語をもっとも早くから熱心に習得し、今なお真剣にこれと取りくみ、かつ日本人に劣らぬ流暢な日本語を駆使して活動している外人の、その大部分が実にサベリオの後輩たるカトリックの神父諸師であることは、知る人ぞ知るである。必要は発明の母といわれるが、必要の面からも日本語習得の苦難の道は、やがて次第に打開されてゆくのではなかろうか。

著者はさきに加藤常賢博士と共著で、角川書店より「当用漢字字源辞典」を刊行し、すでに大方の好評を博すると共に、「全国学校図書館協議会」の推薦図書たるの栄誉をかたじけなくしたが、今また重ねて類似の本書を著すゆえんは、漢字・漢語の真の習得のためには、単なる字源の研究のみでは不十分であり、進んでは語源の追求をも必要だと考えるからである。のみならず、漢字を基本とするわが国のことばの中には、一見して固有語、すなわち「やまとことば」のごとく考えられるが、その実よく調べてみると、意外にも漢字漢語に基づくものが、まだかなり多く存するのではないかと思われるのである。たとえば、「ちゃかす」は、「茶化す」とあて、その意味が「ひやかす」でよいのであろうか、また「ちょうど」は「丁度」とあてて、それでわかるのであろうか。これらの点について、著者はかねてからわが国の現在の国語辞典の説明に

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongboo

は、なお多くの不満を抱いているものである。本書中においては、それらについても折にふれ若干鄙見を述べておいたが、願わくば国語学専門家の諸先生より御批判を仰ぎたく思っている。

ついでにわが国の義務教育における漢字問題について、一言しておかなければならぬことがある。それは小中学における、いわゆる「教育漢字」といわれるものの提出順序についてである。今を去る二十数年前に種々の要請から、「教育漢字の学年別配当」がきめられた。当時、漢文教育側から唯一の委員としてこの作業に参加した著者は、匆匆のうちに小委員会で決定され、全体委員会にかけられたこの案に対し、その不合理性を指摘して、練りなおしを主張したが、多数によって押し切られてしまったいきさつがある。その後、果して偏傍が後に出て、それを含む文字が先に出ているといった矛盾が現場から指摘され、また有力な文字学者からの批判も出ている。すでにこの学年別配当は定着化しつつあり、今にしてこれを改めるのは影響の及ぶところ甚大なものがあろうが、わが国の漢字教育の将来のため、文部省当局が英断をもってなるべく早い機会に善処されることを期待するものである。

本書の成るについては、契・金文の選定や原稿整理などにつき、大東文化大学助教授進藤英幸君の多大な協力を得た。また角川書店の佐野正利編集長の好意あふれる助言や、編集部の森宮保子・宮下正彦氏には綿密な原稿の点検を通じて、その平易化と表記の統一などにつき、一方ならずお世話になった。ここに、右の四氏に特に深謝の意を表する。

昭和五十一年一月

山田勝美

漢字研究の入門

一　漢字の三要素（形・音・義）について

われわれがふだん使っている漢字には、そのどれにも必ず一定の「形」と「音」と「義」との三つの要素がそなわっている。この三つがそなわっていない漢字はないといってよい。「形」というのは、その漢字を組みたてている点や線のことであり、もとは多く略画的の図形であった。漢字が「象形文字」だといわれるわけはここにある。いっぽう「表音文字」にも、「音」と「義」とはそろっているが、「形」というものがない。これが「象形文字」たる漢字との大きいちがいである。つぎに「音」とは、その図形のよみかたである。「ことば」としてのよみかたであって、したがって単なる解釈ではない。解釈ならば、いろいろに解釈できようが、解釈ではないから、そのよみかたは「ことば」として一定していなければならない。そして「義」とは、その図形が表している「意味」である。単なる略画なら、これもやはりいろいろに解釈することもできようが、ただ解釈できるだけではまだ文字とはいえない。それが「ことば」を表しており、「ことば」を媒介として、その表出する「意味」を読みとることができて、はじめて文字といえるわけである。であるから、われわれが漢字を考える場合には、必ずこの三つの点から考究し、この三部分のどの点からいっても、矛盾なく合理的に説明できるのでなければ、その説明は人を納得させることはできまい。たとえば、たまたま「形」のうえからは合理的にその「義」を説明することができたとしても、「音」の方面からの説明がそれにともなわなければ、その解釈は受け入れることができない。このようなことは、少しく専門的に漢字を扱っているほどの人なら、だれでもがよく心得ているはずであるが、さて実際の場合にぶつかると、「形」と「義」とを説明しただけで、もう能事終われりとばかりに済ましているの

が大部分である。これでは、残念ながらほんとうに漢字を説明したとはいいかねる。

だが実は、これにはそれなりの「いきさつ」があるのである。漢字はもともと「形」「音」「義」の三方面から、その本来の意味を探究するのが当然であるのに、清朝の考証学では、もっぱら「形」「義」を中心にして研究するのを「訓詁学」と称するのに対し、「音」を主として研究するのを「音韻学」といい、この二者はそれぞれ独立して別個に研究された。特に「音韻学」はその研究内容が精緻になるにつれて、いわゆる音韻のための音韻研究に終始し、この両者はついに風馬牛もただならぬ関係となってしまった。しかしそれは漢字研究のあるべき正しい姿勢ではない。そこで本書では、必ずまず「形」「音」「義」の三項目を立てて、この三方面より説明するという基本的態度を貫くことにしたのである。

二　字形について

およそ「表音文字」は、ただ音を表示しているだけだから、長い年月がたつうちに、その音の表している元来の意味が忘れさられてしまい、後世からは明らかになし得ないものが多くある。これに反して、漢字は起原的には「象形文字」であり、後になると意味を表す文字と音を表す文字とを合わせた「形声文字」が多くはなったが、それでもとにかく「形」が存在しているために、その字形が造られた時代にまでさかのぼり、そのもっている意味を追求しうるという便宜がある。したがって、かなり古い時代の意味までが的確に把握できるので、古代研究の手段としては、唯一とまではいえないが、かなり重要な武器のひとつであることだけはたしかである。

これによっても、漢字を研究するには、まず最初に問題となるのは「字形」であることが、ほぼおわかりいただけたことと思う。すなわち、単独の文字ならば、これは何の象形か、また複合の文字であれば、それはいかなる字といかなる字とを組み合わせたものか、そのどれが意符で、どれが音符であるか、などが当然問題となってくる。大部分の形声字については、わりあい簡単にこれらを見わけられるが、なかには容易にわからないものもある。たとえば「勝」（二七四頁）が、「朕」と「力」とに分解しなければならない、などはその一例である。とにかく、字形の組みたてがわからないと、

研究の第一歩が踏み出せないわけである。ところが、後世の楷書はいうまでもなく、篆文などでも、すでに本来の意味を失っている字形のものがかなり多い。そこでどうしても原始形にまでさかのぼって古形を見ないと、本来の意味が判明しないのである。

原始形として、もっとも古いものは契文と金文とであり、「**契文**」は中国の殷代（西暦紀元前一五〇〇年ごろ）に確実に存在した文字であるが、今から七十余年前（一八九九）にはじめて出土したもので、亀の甲羅や牛馬などの獣骨に刻まれている文字である。従ってこれは「亀甲獣骨文」または「甲骨文」ともいわれる。「文」とは文字という意味である。

「**金文**」は殷・周時代の祭祀に使われた鼎や鐘（楽器の一種）などの青銅器に鋳込まれている文字である。この二種、すなわち金文と契文との文字は、その刻せられている材質がちがうために、字体に差異がみとめられる。すなわち契文は堅い亀甲の表面をなめらかに削ってから、その上に下書きの字を書いておき、その下書きに沿って鋭利なナイフで刻したものだから、いきおい文字が角張り、先端がするどく尖っているが、「金文」のほうは、青銅を鎔融した液を笵型に注ぎ込む前に、粘土製の笵にあらかじめ文字をほりつけておくのであるから、丸みと角ばりと、ふといのと細いのと、大きいのと小さいのとなど思いのままである。この双方の文字を詳細に比較対照すれば、文字製作の秘奥を解くうえにおいて、大いに役だつであろう。「行」「歩」「疑」「黄」「商」「皇」「臣」などの字は、契・金文があって始めて明白になった字の例である。ただし、現在解読のできている契・金文の総数は、漢字の総数に比してきわめて少ない。いずれも二千字には足りないから、契・金文のない漢字については、「籀文」（大篆）、「篆文」（小篆）、「古文」「石文」「古璽」などによって、その原始形を認定しなければならないのである。

「**籀文**」とは、周の王室の太史という記録を掌る役人が持っていた読本に使ってあった書体の文字である。この文字の一般的な特徴は、金文や篆文にくらべると、字画が複雑な点にある。漢代までこの種の書物が残っていたとみえて、部分的には『説文』（後漢の許慎の著。西暦一〇〇年ごろ成る。正しくは『説文解字』という）に載っているものもある。

「**篆文**」とは、おもに『説文』に載っている字で、「籀文」を「大篆」というのに対して、また単に「小篆」ともいわ

れる。大篆を簡略にしたものだから「小篆」ともいうので、秦の丞相の李斯などの手によって作られたものといわれる。今日でも篆刻などと称して、印判などに刻まれている方形の字体がこれである。

またきわめて稀にしか残っていない「**古文**」とは、これまた『説文』と魏の『三体石経』に載っている文字で、戦国時代に中国の山東省地方で行われた文字であるといわれる。そのほか、「**石文**」とは、石鼓や秦碑などに見える字であり、「**古璽**」とは古印のことで、秦漢以前、春秋戦国（西暦紀元前八世紀――同三世紀）のころの文字である。

本書では、字体の変遷を明らかにすることによって、文字製作の意図をつかむために、以上各種の字体の代表的なものの中から、比較的に字形のととのっているものを選んで掲出しておいた。

「字形」の項目の内容について一言いっておきたいことは、本書の記述と『説文』とを比較すればすぐわかるように、古代においても「形声字」がかなり多いということである。もっとも今日の『説文』のテキストは、唐末のころに校改されたもので、すでに許慎の原本そのままのものではない。したがって同じく許慎の系統をうけておりながら、『説文大徐本』（徐鉉の校訂した説文。徐鉉は十世紀の文字学者。徐鍇は弟）と『説文小徐本』（徐鍇の著。『説文繫伝』ともいう）とでは、説明を異にするものがかなり多くあるのである。すなわち大徐本が「会意字」とみていても、小徐本では「形声字」とみておるものがあるが、ここではそれらはすべて「小徐本」に従って「形声字」とみた。また小徐本が「会意字」とみていても、後世の学者が「形声字」とみているものも、すべて後者に従って「形声字」とみた。したがって、本書においては、『説文』（大徐本）に比較して「形声字」が断然多くなっている。しかしこれによって、かえって牽強付会な解釈をまぬかれていることを理解してほしい。従来とかく文字を神聖視するのあまり、いかにもまことしやかな会意的説明ですましていたのが、これまでの説文学者の通弊といえるが、文字はけっして複雑な観念を総合して作られたものではないと考えられる。かかる立場からして字形を分解したから、この立場を了解して「字形」の項目をみていただきたい。

字体の大略の歴史を表示すると、次のごとくなっている。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongboo

殷代（前一五〇〇ころ～）　周代（前一〇五〇ころ～）　戦国時代（前四〇三～）　漢代（前二〇六～）

甲骨文字（契文）

鐘鼎文字（金文）――――金　文――――　金　文……隷書→楷書

（石　文）　古　文

籀　文（大篆）

篆　文（小篆）……

三　字音について

バイブルにもいうように、「はじめにことばありき」で、「音」は「字」よりもはるかに古くからあった。文字がまだ作られず、「ことば」すなわち「音」だけが行われた時期がかなり長く続いたと思われる。その後、絵画ないしは簡単な略画的文字で意思を伝達することになったのであろう。このような発生の順序からいって、文字を考えるばあいに、「字形」を理解することの重要さはもちろんであるが、まず「音」がいかなる意味を表しているかを知ることも、さらにいっそう重要であることがわかるであろう。なんとなれば、「字」よりも先に「音」があって、その「音」に「意味」が含まれていたからである。これは、文字を越えて「ことば」の領域にふみ込むことになるが、ここまで突っ込んで解明しなければ、実は文字そのものも的確にはわからないといいたい。

ここで一言ことわっておかなければならないことは、ひとくちに「音」といっても、正確にいえば「中国の古代の音」についてであるが、それは今日においてはもはやわからないといってもよい。もちろん、スウェーデンの学者カールグレン（中国名は高本漢）氏などによって、種々の方法により擬測した推定音が出されてはいるが、それにも多くの問題は残

されているのである。そこで本書では、音の変化や通用は声符を同じくするものを駆使し、音の表示には六朝以後（三世紀――）の音の、しかもわが国に輸入されてからわが国音化したものを、「カタカナ」によって示すことにした。古代音はいわば死語のごとく正確には判明しないのであるから、便宜の方法によってもよいであろう。であるから、ここで採用した方法もまた、一つの方法として許されるであろう。必ずしも現代中国音によらなければならないこともあるまい。かくも重要な「音」であるにもかかわらず、今日まで文字を考えるにあたって、これがとかく疎略に扱われてきたことは否定できない。

たとえば、「馬」という文字を問題にするばあい、この字の出現しない以前から、あの動物を「バ」という音で呼んでいたのである。であるから、「馬」の字は　象形字」で、ある動物の形をかたどったにすぎないが、字がまだ作られておらず、あるいはすでに作られてからも、「バ」という音でこれを呼んでいた時には、なぜこの動物を「バ」と呼んだのか、その理由を考えてみることが必要となってくる。さらにもう一例をあげると「鼻」という字を考えるばあい、この字は字形としては「自」（鼻の象形）と「畀」（音符）とからなる「形声字」であるといえば、これで一応の字形は説明されたことになる。しかし、この字の作られない以前から「自」あるいは「畀」の音で「鼻」のことを呼んでいた。すなわち、「音」は文字の作られる以前から存在していたのである。すると、「鼻」を「自」あるいは「畀」の音で呼んだのはなぜか、その「音」はいかなる意味であったのか。鼻のいかなる特徴をとらえて、この「音」で呼んだものであろうか。

ここまでくると、字源の問題から一転して、語源の問題になってくる。語源の研究は一般には言語学者のしごとであるが、中国言語学を研究する者は、ある程度は「字形」を無視しえないから、文字そのものにかかわりをもつことになる。なんとなれば、「形声字」などは明白に音符をともなっているからである。したがって、古代音の音値は概して明白ではないが、この音符、または後世における二字の「反切」（上の字の子音と下の字の母音とを合わせて漢字の音を表す法。たとえば、「難は那干の反〈または切〉」とあれば、nan＝n(a)＋(K)an　となる。）による音、あるいはまた注釈に用いられている字によってその音を擬測し、意味を知ることが可能である。この考えに基づき、「語源」をわが国音化した音で

示し、その意味を説明したのである。この説明においても、なるべく広くこれまでの学者の解釈を参考とし、独断を慎しんだつもりである。したがって、「字音」の項を見るときには、その字の音とともに、その語源を説明してあることを念頭においてもらいたい。

それにともなってぜひとも注意しておかなければならないことは、「音」が同じであれば、いつでも同じ字を用いてこれを表すとはかぎらない、ということである。もちろん同じ字を用いるばあいもあるが、また同音のちがった字を用いることもあるわけである。なんとなれば、すべての文字が一時に、あるひとりの手によって作られたものではなく、文字によっては製作年代にかなりの隔りがあるからである。また、音を表す文字が同じであっても、その表す意味がちがうばあいもあるということである。それを音を表す文字は、みないつも同じ意味を表すと考えて、漢字をそれによって分類している者もいる。その方法は一見していかにも整然たるもののようであるが、事実は非常に危険な方法である。さらに、音を表す文字が、その音値と一致するばあいもあるが、必ずしも完全には音値と一致せずに、それの近似音を表しているにすぎないばあいもあることは、近ごろの言語学者のいうところである。以上の見地からすると、本書は「字源辞典」であると同時に、「語源辞典」であるといってもよいのではないか、とひそかに考えている。

漢字の本家の中国においても、意識的に語源を説明したと思われる書物は見当たらないといってよい。当然あるべきだのに、それがないのである。もっとも後漢末の劉熙に『釈名』八巻がある。この書においては、同音か近似音かの、そのどちらかによって文字が解釈されている。従来、この書物は一部の学者からはあまり尊重されなかったが、他の一部の学者からはかなり高く評価されてきた。われわれの見るところでは、その同音、あるいは近似音による説明に、こじつけと思われる部分も少なからずあるが、なかには正確に語源を説明しているものもあって、結果からすると、その結論は全面的には承認することはできないが、方法論的には漢字の語源を説明したものの元祖と称してよいかと思う。したがって、本書はこの『釈名』に負うところも少くない。また、古典の注釈のなかにも、よく注意して読むと、音に基づいている注釈がかなり多く存しているから、これらを見ると、おのずから語源の解釈として採るべきものが少くない。とにかく、こ

の語源を解明してこそ、始めて字源を説明したといいうると思う。字形を何とか説明するだけでは、半分のしごとでしかない。いわんや、「字形」の分解と、語源の説明が矛盾したり、また、不一致であったりしてはならない。この二者が完全に吻合してこそ、正しい「字義」の説明が可能となるのである。

四　字義について

まず第一に注意しておかなければならないことは、漢字がわが国で使われはじめてから相当に年代がたっており、本書にあげた字のごときは、ほとんど国字といってよいくらい日常使われているために、通用義の概念と文字とがひじょうに密着していて、文字を見ると、その字を組みたてている部分の字とは関係なく、すぐにその通用義が頭に浮かんできて、それがその字の本来の意味であると考えがちであるのは、むろんそれで正しいばあいもあるが、どの文字についても正しいとはいえないということである。本書のうちに、「借用」という項目を立てて説明してある字は、このことの当てはまる字である。たとえば「難」の字は、今日では「困難」の意味に使われているが、よくよくこの字を見ると、「ふるどり」といわれる「隹」字を意符として持っている。「隹」は「鳥」の意味であるから、「難」字は鳥に関するなんらかの意味の字でなければならない。「鳥の名」と「困難」の意とは関係がないから、「困難」という意味に使うのは、ただ音が近いので、この字を借用したにすぎないことがわかる。してみると、「困難」という意味を表す本字は、別になければならない。その意味の本字は「艱」である。元来、「困難」とは「艱難」と書くのが正しく、これは畳韻の連言（同じ韻の字を重ねた語であって、字に意味があるのではなく、その二字の音が意味を表していることば）であり、「艱」がその意味を表している。「艱」は「土地が粘土で耕作がしにくい」という意であり、それから延長して「困難」の意となったのである。また「番」という字は、今日では「番号」と熟して、順序を表す意味などにしか使われていないが、よくこの字を見ると、「田」の意符を持っているから、「田」に関する意味の字でなければならない。したがって、「一番」「二番」という意味に使うのは借用である。この意味の本字は「反」で、「代わる」意味からきている。以上に述べた例で明らかなように、

その字を組み立てている、特に意味を表す字、すなわち「意符」に注意しなければ、正しい本来の意味を把握することはできないのである。

漢字の本家の中国の辞書を引いても、まず通用義を出しているのが普通である。辞書が日常の用を弁ずるのを目的とするからには当然ともいえるが、文字の根本を説明したといわれる、辞書界の王座に位する後漢の許慎の『説文』でさえも、やはりこの種の弊をまぬかれえないのであるから、それ以外の辞書についてはいうまでもない。しかし、本書は「語源辞典」であって、漢字の起源を説明したものであり、文字の組みたてを冷静に観察し、これまでの学者の諸説を検討しての結論を述べたものであるから、たとえ通用義とちがっているばあいがあっても、奇異の感を抱かないでもらいたい。たとえば、「臣」という字を冷静に見れば、これが『説文』のいうように「屈服の形」とはとうてい思われず、「黒い大目玉をむいて目を見張っている形」であることに異存はないはずである。この書物には、そのように説明しておいた。であるから字形を見るばあいには、一応、既成の通用義の知識を捨て去り、虚心になることが必要である。また、このばあい「臣」字の本来の意味と、通用義の「臣下」という意味とがどういう関係にあるかと考えるのが普通であるが、こうした考えかたは正しくない。ただ同意のために借用したにすぎないからである。したがって「借用」の項目をたててそのことをことわり、さらにその「本字」を示しておいたのである。

このように文字の起源的意味を問題として研究するのは、文字の真実の意味を知る学術上の必要からであって、そのほか別に目的はない。というのは、中国古代文化の研究は、古代文字の研究を除外しては不可能だからである。後世の通用義の研究もむろん必要であり、それが本来の意味の「延長」であるばあいもかなり多い。しかしこのばあいにも、本来の意味を明らかにすることが、通用義の意味内容を的確に把握するうえで、大いに利益があることは、日ごろ痛感しているところである。それにもまして、多くの原義を究明し、それを段々と積みかさねてゆくと、古典や文字をただ表面から一見しただけでは知りえないような事実が、続々と明らかになってくるから、文字の原始的意味の研究をゆるがせにすることはどうしてもできないのである。

五　六書について

ここで「六書」について、簡単に一応ふれておくことにする。「六書」の配列の順序や、そのちがう呼称の問題などは、あまりに専門的になるので、しばらく触れないでおくことにする。

「音」だけで用を弁じ、まだ文字のない時代が終わると、つぎには自分の意思を直接に、あるいは間接に、時間的あるいは空間的制約をのり越えて、伝達する必要が生じ、これを「絵画」に書き表すこととなった。これが文字の始めである。「絵画」を正確に書くことはめんどうであるところから、いきおいその略形だけを書くようになり、これが「象形」文字に発展したのである。単独の象形では表しえない複雑な意味を表すばあいには、二つあるいは三つの象形文字を組み合わせて、一つのまとまった意味を表すようになる。かくして生まれたのが「会意」文字である。このばあい、その一字が意味を表すと同時に、また音を表すばあいがある。これを「会意に声をかねた字」という。ここにいたると、文字に「音」を表示しようと意図がうかがわれる。一つの象形字に、さらにその字の音だけを添加したばあいがある。「形」を表すものと、「音」を表すものとの二字が組み合わさっているから、これでもやはり「形声」文字ということができるが、この種の文字はきわめて少ない。つぎの段階に現れる「形声」文字は、意味を表さないで単に「音」だけを表す文字と、その字の意味そのままに用いた字との二つを合わせて一字にしたものである。たとえば、「短」の字のばあい、「矢」はその意味を表し、「豆」はただ「トウ」という音だけを表すにすぎず、「豆」そのものの意味とは何の関係もないごとくである。しかしこの場合、単に「音」だけを表しているかにみられるほうの字において、実をいうと、その「音」もなんらかの意味を表しているのであるから、本質的には「会意」の文字である。とはいえ、この字はただ「音」を表している符号であって、その字の意味をそのまま用いていないという点からして、やはり純然たる「会意」文字とは異なっているわけである。漢字の九割以上もがこの種の形声文字である。この「形」と「音」とを結合して一つのまとまった意味を表すという方法は、ある複合の観念を表すのにはきわめて好都合であったので、何万というほど多くの漢字は、まったくこの方法に

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongboo